

黒田実践【第5学年 社会科】

～ ユメのコメ 米問題を解決しよう ～



本実践の主張点

提案Ⅰ 教科学習とカリキュラムの関係を明らかにするために、「何を」「どのように学び」「何ができるようになるのか」を明確にする。

提案Ⅱ 学習者の積極的評価を促すために、①単元にストーリー性をもたせる。②実社会とつなぐ。③自己の生き方・在り方とつなぐ。

教科学習とカリキュラムとの関係の明確化

【教育課程企画特別部会論点整理をもとにした論の整理】

本提案では、本校の教科学習とカリキュラムの関係がシンプルに整理された。論点整理に示された、「何ができるか」を育みたい資質・能力、「何を学ぶか」を年間指導計画に示されている学習活動、そして「どのように学ぶか」を授業づくりの3つの視点として関連付けて整理したことで、本校の研究と国の方向性とのつながりが見えてきた。さらに、教科学習において、単元の内容を、この3つの視点にテンプレートとして当てはめながら授業を構想できるようにしたことで、授業づくりを行う際、子どもの高まりや問題解決のイメージがより明確化され、具体的支援につながるというメリットも見えてきた。つまり、育みたい資質・能力や学習内容をより明確に考えておくことで、そこにつながる授業づくりのしかけも具体化していくということである。

【自分にとって意味のある知の捉えと、それを育むための方策】

ここでは、以下の項目が定義付けられた。

自分にとって意味のある知は・・・

- ① 4観点それぞれの力が必要十分に備わることで自然と育まれる。
- ② 教科学習の学びを世の中の事象について位置付け、新たに創造されるもの。
- ③ 一人一人の認知的な個性が認められる。
- ④ 教科の本質と密接なつながりをもつ。
- ⑤ 「解が1つでない、または発見されていない」ことを単元の課題として設定したときに創造される。

知についてはさらに、「活動が活発だが、学びがない」というアクティブラーニングの弊害とでも言うべき状況をつくらないために、教科学習において知の構造を明らかにすることが提案された。ここでいう知の構造とは、単に用語の意味や教科の基礎的・基本的な内容を示す「断片的な知」、問題解決を経ることによって明らかにしていく「関連的な知」、そして教科の本質に関わり汎用性の高い概念として位置付けられる「総合的な知」のことである。確かに、教科や単元の本質、4観点の評価基準を踏まえた上で子どもの「知の構造」を明確にしておくことで、教師は単元の展開に見通しを持ち、具体的な子どもの姿や指導の重点をイメージしやすくなるというメリットがあると考えられる。

子どもが自分にとって意味のある知を生み出す状況をつくるためには、その拠り所となるべき教科の本質的な内容を今一度考え直しつつ、それらを教材として子どもたちにいかにして出合わせ、どのように向き合わせていくのか、改めて考えてみる必要がある。

学習者の積極的評価を促すための方策について

正解のない課題が多様に存在し、多様な価値観をもった仲間とその都度最適解を見出していくことが求められる未来においては、「教師が行き先を示し、誘導する学び」ではなく、「子ども自身が行き先を考え、主体的に解決していく学び」ができる状況をつくることが大切である。ここでは、子どもが自分で自分の学びを見つめ直すことができるように、「子どものものさし」づくりの要件について提案された。子どものものさしが生まれるためには、「単元にストーリー性をもたせる」→「実社会とつなぐ」→「生き方・在り方をつなぐ」という段階を経ることが大切であるという提案であった。黒田実践ではさらに学習者自身の積極的評価を促すために、4観点を子どもの言葉に変換して示すとともに、一人一人が自己の学びのプロセスを表現できる場を積極的に設けていた。子どもたちが目指すべきゴールを教科の内容に加えて自己の成長と置くことで、ダブルスタンダードの学びになりながらも、常に問い続け、学び続ける子どもの姿につながっていくのではないだろうか。

成果と課題

- カリキュラムを論点整理の内容と関連付け、論をできるだけシンプルに整理したことで、カリキュラム全体と教科学習との関係が明らかになり、本校の目指すべき方向性がさらに見えてきた。
- 評価の観点を子どもに示し、自己の学びのプロセスを表現できるようにしたことで、そのプロセスに関わる解決策としての「子どものものさし」が生まれやすい状況がつけられた。
- △ 教科の内容と育みたい資質・能力とのダブルスタンダードについては常にバランスを考え、子どもの実態に合わせて臨機応変に扱っていく必要がある。

The Futaka Spirit

(現教だより第13号)

5年 社会科

単元名「ユメのコメ ～米問題を解決しよう～」

指導者 黒田 拓志 先生

一人一人のよさを認め合い、高め合おうとする支持的な学級風土の中で、自信をもって語り、聞き合う子どもたち。米問題を本気で解決したいという熱い思いが伝わってきました。子どもの姿で語る、まさに圧巻の授業でした。

【子どもの活動】

1 学習課題を確認する。



ペア交流を通してこれまでの学びについて想起する

2 農業を発展させるための3者の取り組みを関係図に表現する。



学びの履歴を抛り所に語り合う

3 全体交流を行い、問題解決の方策を明らかにする。



自信とこだわりをもち熱く語る子どもたち

4 獲得した概念の再吟味を行い、農業を発展させるための新たなアイデアについて話し合う。

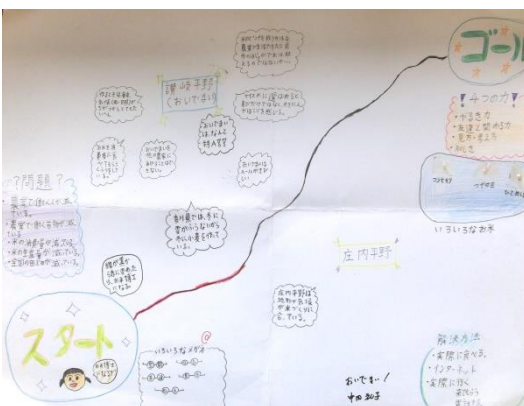


自然発生的な交流の起こりと広がり

6 単元の課題の進み具合について確認し、今後の問題解決への見通しをもつ。



自分にとって意味のある知をつくる



学びのストーリーを描く「冒険の書」(文責 橘 慎二郎)

【黒田先生コメント】

本校の今年のサブテーマは、2領域カリキュラムによる、主体的、共感・協同的、創造的な学びの実現です。提案や授業では、このサブテーマに忠実にチャレンジしました。教科学習は、3年次を迎え、共通理解を図り、提案と授業の両方の質が高まっています。今後も、提案、授業共に、主体的、共感的・協同的、創造的な学びの実現を目指していきたいと思っています。ありがとうございました。